

カキ「太秋」の主幹形整枝隔年交互結実栽培

果樹試験場 かき・もも研究所

研究のねらい

カキ「太秋」は大果で食味が優れ、消費者にも人気の高い品種ですが、樹勢が低下しやすく、樹勢の低下とともに雌花が減少（雄花が増加）するため、収量が低下しやすいことが問題となっています。そこで、安定的に雌花が確保でき、かつ省力・軽労的な栽培方法を検討しました。

研究の成果

- ①連年結実では樹勢の低下が速く、年々雌花着生新梢数の割合が低下するとともに、初結実から数年で収量が減少に転じます。一方隔年交互結実では、2年に1回ではありますが雌花着生新梢数が安定的に確保され、収量も安定します（図1）。
- ②遊休樹のせん定は、冬期に側枝単位で基部2芽を残す切り返しせん定を行い、翌春の花芽の雌雄が判別できた時期（概ね4月上・中旬）に、再度雄花着生枝をせん除します。こうすることにより、不定芽からの新梢が多くなるとともに長い結果母枝が多く確保できます（図2）。
- ③着果管理面では、人工受粉を行わなくても生理落果しません。また、人工受粉を省略することにより、果実肥大はやや劣るものの、ヘタスキや汚損（条紋タイプ）および果頂裂果が軽減され、秀品率が向上します。

成果の活用面・留意点

- ①年間の主な作業とポイントは表1のとおりです。
- ②栽植密度は4m×2m（125本/10a）が適当と思われるが、園地条件や導入機械等を考慮して決定する必要があります。



図1 収穫期の状況（2002）

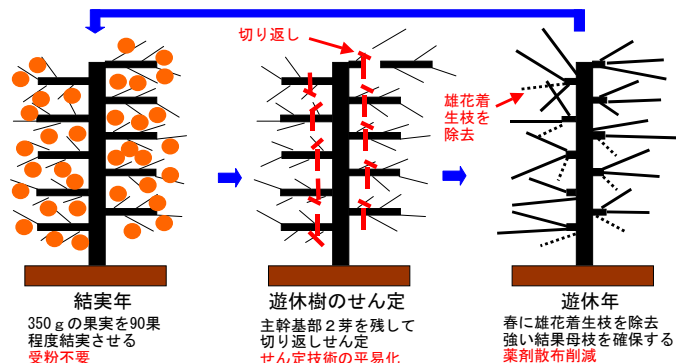


図2 カキ「太秋」の主幹形整枝隔年交互結実栽培

表1 「太秋」の主幹形整枝隔年交互結実栽培の主な作業とポイント

年	時期	作業項目	作業内容とポイント
結実年	冬期	せん定	強い結果母枝を20~25本/樹確保
	4/下~	摘蕾	1枝1蕾
	5/中~	人工受粉	不要
	6/中~	摘果	約90果（約350g/果）/樹
	夏期	かん水 枝吊り	夏期に果実肥大を促進 枝折れ防止
遊休年	9/上・中	反射マルチ+摘葉	果皮色向上と汚損果軽減 シルバーマルチ敷設率：約60% 摘葉処理：果実周辺部2~4葉
	10/下	収穫	基準：カキ用カラーチャートで赤道部4
	冬期	せん定	側枝単位で主幹基部2芽を残して切り返しせん定
	4/上・中	雄花着生枝の除去	早期に雄花着生枝を除去し、不定芽からの新梢を誘発
通年	4/下~	摘蕾	雌花の全摘蕾（新梢伸長促進）
	7月	摘心	7月中に新梢伸長を停止させる（無着花枝の発生抑制）
	夏期	かん水	乾燥防止（円滑な花芽分化）
通年	病害虫防除	園地別隔年交互結実で果実に関する薬剤散布は不要	

注) 栽植密度：4m×2m=125樹/10a、目標収量：4t/10a（32kg/樹）/2年
時期は和歌山県を基準

（問い合わせ先：0736-73-2274）